

土毛
21(画)

前橋の滝沢さん開発

「救急車を呼びたいけれど、日本語が話せない」「日本語が分からないから病院に行きにくい」。こんな外国人の不安を解消するための電子書籍やスマートフォン（スマホ）向けアプリの開発が進

められている。開発に取り組むのは地域情報交流センター（前橋市）代表の滝沢清美さん。受診の際に必要な言葉を多言語でまとめた電子書籍を発売したほか、自動音声で緊急通報できるアプリも開発中で、「日本に滞在する外国人に安心、安全を提供したい」と話している。

え越壁の言葉 安心受診

多言語で通報アプリ

ビジネスプランコンテストで優秀賞を受賞、来年2月に開かれる優秀ビジネスプラン発表会で発表する。

来年度には県内の消防や警察の協力を得て、英語やポルトガル語、中国語など約10言語で社会実験を行い、実用化を目指す。滝沢さんは「外国人だけでなく、聴覚障害者や寝たきりの人にも役立つ」と説明する。

外国人が受診する際、現在は県が養成している医療通訳士が医療機関に同行して医師との会話を通訳している。この負担を軽減するため、滝沢さんはIP電話を利用し、医療通訳士がどこにいてもつながる機能をアプリに盛り込めるよう研究している。

開発中の「多言語緊急通報アプリ」は事件や事故、火災、救急などの項目が外国語で表示され、通報したい内容を選択すると、110番や119番に電話がかかって日本語の自動音声を流す仕組み。ことしの県の

滝沢さんは群馬大医学部附属病院システム統合センター研究員、NPO法人地域診療情報連携協議会理事長としても、情報通信技術を用いた遠隔医療や外国人が受診する際のサポートなどを研究してきた。群馬大では公開講座「医療通訳ホ

ランティア育成講座」を開設し、人材育成にも取り組む。ことし10月には、医療機関を受診する際に必要な言葉をまとめた電子書籍「多言語問診票」（Kindle版、297円）を発売。

「頭痛がすることがありますか」などの質問と、「いい」「くまれに」などの回答を日本語と外国語で併記している。29言語で販売しており、海外でも売れているという。

県のまとめによると、県内の外国人住民数は昨年末時点で約4万人。外国人医療観光にも注目が集まっており、外国人と医療関係者とのコミュニケーションを支援する人材やサービスの需要は高まると予想される。滝沢さんは「言葉が分からずに病院に行くのをためらったり、受診の際に誤訳が起きたりすれば命に関わる」と必要性を強調している。